

伝えたい「ありがとう」

「ありがとう」この言葉を伝えたい人がいます。それは、私を可愛がってくれた祖母です。祖母がいてくれたおかげで私は今、介護士を目指しているのです。

私の家は両親とも働いており、私の世話をしてくれるのは祖母の役割でした。躰に厳しく、それでいて、優しく温かく、わがままだった私を広い心で受け止めてくれる唯一の存在でした。しかし、私が小学校に入学したぐらいから入院を繰り返していた祖母は、私が小学三年生の時に亡くなりました。最初は祖母が亡くなった事実をきちんと把握することができませんでした。今まで感じたことのないような重い空気が周囲を包むと、幼い私でさえ、辛い現実を理解せざるをえませんでした。初めて直面する「人の死」。大切な人がいなくなることがどれほど悲しいものなのかわかった瞬間でした。

小さい頃からヘルパーとして働く母の姿を見ていたので、将来は介護の仕事に就きたいと思っていました。しかし、介護と人の死がどうしても切り離せないように思え、迷いを感じるようになっていきました。

うになりました。「もう辛い思いはしたくない！」。祖母の死後、介護の仕事への思いは薄れていきました。

しかし、母のある言葉をきっかけに、私の中に残っていた介護に対する思いが、再び私を介護の夢へと導いたのです。私が母に「仲良くなった人が亡くなったら、悲しくないの？ どうしてこの仕事が嫌にならないの？」と聞くと、母は「自分が納得できる、精一杯のことができたんだったら嫌だとは思わない。自分も、お年寄りの方も、楽しく過ごせたら、それだけでいいと思うよ」そう言ったのです。私はその言葉を聞き、重かった気持ちが一気になくなったような気がしました。それと同時に、母に対する尊敬の気持ちが生まれました。それからの私は、学校や地域で主催されているボランティア活動に積極的に参加するようになりました。介護施設の体験学習や職場体験、夏に行われる野外レクリエーションの補助など、どの体験でも、皆さん楽しんでくれました。どんな些細なことにも反応を返してくれ、笑顔で私に話しかけてくれました。その笑顔を見るたびに「また頑張ろう」という気持ちが、ふっふっつと湧いてきました。

私は昨年、一年間の講義と実習を終え、ホームヘルパー二級の資格を取得することができま

した。そして三年生になった現在は、地域の施設で週四時間、実習を行っています。実習先では、祖母にしてあげたかったことを、利用者の方にできるよう、一つ一つの行動に気持ちを込め、誠意をもって取り組んでいます。その思いが伝わるのか、多くの方が温かい感謝の言葉を私にかけてくれます。実習を終え、利用者の方から「ありがとう」という言葉を頂いた時、嬉しくて、自然に笑顔が溢れ、私の頭の中には祖母の顔が浮かびました。

実習へ行くと、テキストでは学ぶことの出来ない実際の現場での介護を学ぶことが出来て本当に良かったと思います。

介護をするには、学ばなければならないことがたくさんあります。嫌なことも、時には、投げ出したくなるほど、苦しいこともあるかもしれません。しかし、もし介護士になる夢を捨てていたら、私は、人に感謝される喜びも、人に尽くしたいという優しさも持てなかったはずです。私は今、「おばあちゃん、私の手で介護することは出来なかったけど、おばあちゃんにしてあげたかった事を、これからたくさんの方にしてあげたいです。見ていてください」と、伝えたいのです。

将来私は、故郷の平戸市大島村で、介護の仕事に就きたいと思っています。大島村は長崎県の北松地区で一番高齢者率が高く、これからもその傾向が続くと考えられるので、介護士の需要も増えてくるはずです。それに小さい頃からお世話になった方々を介護できるのは、なにか恩返しできるような気がして私自身が嬉しいのです。色々な出会いがあって、色々な別れがあって、介護士として、人として、様々な成長のできる介護の仕事を、私自身のためだけでなく、介護士という夢へ導いてくれた祖母や母のためにも成し遂げたいのです。そして、仕事だからという気持ちで人と接するのではなく、目の前にいる全ての高齢者に対して、素直な気持ちで接することのできる人になりたいです。

私は、この高校で、少しずつ夢の実現へ向けて前進しています。悲しみも、苦しみも、喜びも、楽しみも、全てが私の誇りと言えるような立派な介護士を目指して、これからも頑張りたいと思います。